
夢の痕

石鍋 盥回し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の痕

【Nコード】

N5559B

【作者名】

石鍋 盞回し

【あらすじ】

『護りたい人がいた。』俺を甘党にしたアイツ。大食らいで、純粹だったアイツ。失いたくない、年上の彼女。だからこそ、俺は。『何をしてでも、彼女を救いたかった。』遺伝子操作が行われたクローンが、少しずつ社会に溶け込んで活躍し始めていた、ある未来。何の変哲もない大学生のカップルがいるある場所で起きた事。『長く、なるよ。それにけっこう退屈な話になる。』

第一話

「ねえ、こゝ、おなかが減ったのだわ。」

「またか、ついさっき食べたばかりか？」

時刻は午後二時四十七分。

俺を愛称で呼び、タンタンくつを鳴らして、舞踏会のオヒメサマみたいにアーケードの色つきタイルを渡る目の前の女性。

午後の講義をサボる決意をしたのは『源流庵』の本格抹茶パフェを食べたくなった彼女が問答無用で俺の荷物（主にサイフ）を持ち出したからだ。

ちなみに、抹茶パフェのあとは『でんでん堂』のカスタードらやき。その後『銀船』の大船たこ焼きを二舟。

『九色陶板』のココア、きな粉のあげパン各一個。つまり昼食から食べっぱなし。

そして今が…

「ほらほら、あそこのラ・クルウセ・トマリのフルーツタルトがまた絶品なのー！」

知ってる。

あそこのフルーツタルトは厳選素材をふんだんに使ってある直径三十五センチの甘〜いタルトだ。

俺もどっちかといえば甘党だ。でもさすがにコレだけ食べた後に……

いや。

違ったな。

眼前で、彼女は俺の腕を掴み、長年探し続けた財宝の眠る遺跡を前にした冒険家の勝鬨のような歓声を上げた。

俺は、ただ、苦笑する。

「なんなの？こゝは私とタルトを食べるのが不快なの？」

温度差を感じ取ったのだろう。

彼女はぷうと針の無い針千本のように口を膨らませた。

「俺甘いものそんなに好きじゃない。それに今日は食べ過ぎた。」

「嘘っ。今声のトーンが下がったわ！こゝはいつも嘘つくときはそうなるのだわ！」

かなわないな。

頭を掻いて、また苦笑。

俺は、彼女と付き合って、甘党になった。

彼女は俺こと齋井^{さいい} 高道^{たかみち}の恋人。名前は阿佐美^{あさみ} 雲雀^{うずはつ}。
雲雀は高道の『高』を文字って『こー』と俺を呼ぶ。

俺が大学に現役で入学した年、一浪して入学した一つ年上の彼女だ。
入学してまもなく付き合っで、もう一年半付き合っている。

俺は喫茶店を見つめて、これから味わうであろうその絶品タルトの
味を想像し爛々と目を輝かせている雲雀に、小さく、今日何度目
になるのかもわからないため息交じりの苦笑をもらした。

手を引かれるまま（もつとも拒む気なんてサラサラなかったが）オ
ーブンテラスに座り込んだ。

ログハウス風のつくりの店にあわせ、こげ茶色の木目が強調された
丸テーブルと椅子。

かすかに吹く風に、店の屋根から伸びた深緑色のパラソルがはたは
たと揺れている。

オーブンテラスの端には『蔦が絡まった木をデザインしたロールケ
ーキをデザインした』手すりがあり、その上にはリスの彫り物がし
つらえられていた。

この店に来たのはこれで二度…いや、三度目。毎回、その手すり越
しに見やる街の雑踏には不思議な感覚を覚える。

こっち側は、背筋が冷やりとするくらい温度は低く、そのくせなん
だか温かい。

向こう側は往来の人ごみで温度は高く、そのくせ冷たいイメージと
いうか。

視線を戻すと、会い向かいに座った彼女はテーブルに備え付けられ
ているメニューを開いてウンウンと唸っていた。

どうせ、どれも食べたいけれどダイエットを考えなくちゃ、とか考
えているんだろう。

いつものパターンだ。困り果てたようにこっちに上目遣いの視線が
……やっぱり向いた。

「こゝ……」

「安心してくれ、精一杯手遅れだから。」

「こゝー！薄情なのだわ！」

——どうやら、的中らしい。

とはいえ、雲雀は好きなものを好きなだけ食べても、それこそ用法
用量をまもって一ヶ月間断食修行をしてもほとんど体重が変わらな
いことが自慢らしい。

おかげで俺は、というと付き合ってから現状維持のために体を動
かす比率が上がり、いつの間にか大概のスポーツが得意になってい
たというウェハースのシールみたいなおまけがついた。

「好きなものを頼めばいいだろ。俺はそれらを一口ずつもらえれば十分だからさ。」

「そういつてももらえれば話が早いのだわ。」

雲雀のくせである口をあけずに口の端をU字に曲げる独特の笑みを見つめて頬杖をついた。

テーブルの上のドーム上の物体の天辺についているボタンを押すと、店内でビィという音が鳴っているのがかすかに聞こえた。

程なく。

濃紺のふわふわした服を纏い、その服の上にはレースのついた純白のエプロンをつけたメイド姿の女性がすべるように俺たちの前にやってきた。

髪を結い上げてこれまた純白のレースつきの帽子と髪留めであらわになっている耳はかすかに尖り、控えめに空をさしていた。

その肌はまるで今初めて日光の下に出てきたかのように白く透き通り、後れ毛がかかるうなじには、どきり、とするほどの妖艶さがあるようなきがした。

「ご注文は、お決まり、でしょうか。」

かすかにオーダーを求める言葉にたどたどしさがある。

なるほど、彼女は“クローン”の《ゴッデス種》だ。

今までぜんぜん気が付かなかった。

クローンが働いている店というのはまだこの界限だと非常に珍しい。とはいえ最近のオリコンにはゴッデス種の歌がトップテンに二曲は食い込むことが珍しくない。

また、ここ埼玉県内でこそ少ないけれど世界的に見たらすでに各分野に特化したクローン種は多数活躍している。

クローンの人権が提唱され、国連に加盟している国々で正式に採用されてからもう五年強。

そういえば、法案が採用される前からクローン乳母に世話になったらしい雲雀はさつきからだただの店員に対する以上の愛情を込めて（もしくは多分に甘味に対する愛情が混じっているだけなのだろうか？）そのクローンにオーダーをしているようにみえた。

俺には、クローン人権法を拒絶する要素もない。むしろゴッデス種の歌は好きだ。

だからどちらかといえば巷にいるクローンの人権獲得反対派に嫌悪感を抱くし、多少、そう、多少クローンにプラスの思い入れもある。

「こゝ、コーヒーと紅茶どっちにするの？」

「ああ、そうだな…タルトなら紅茶にしておく。」

「そうね、そうだね。じゃ、あとの紅茶を二杯お願い。」

「かしこまり、ました。少々、お待ち、くださいませ。」

もとよりオペラや賛美歌などの英文に対応するように《調律》されているゴッデス種はやはり日常会話の日本語を覚えるのが難しいのだろうか。

しかし、たどたどしくもその声質は聞惚れるほど澄みわたっていた。

他愛のない会話を交わして五分くらいだろうか。

直径一メートルほどのテーブルの上には色とりどりのスイーツがぽつりぽつりと順に運び込まれ、一品目から十分ほどでその面積の大半を埋め尽くした。

やはり圧巻はテーブルの中心に座している巨大なタルト。

「見ただけで別腹まで一杯になりそうだ。」

「そう？ たった今八つ目の胃袋まで空っぽになったのだね。」

「…… エンゲル係数って知ってるか？ きっと、雲雀は下手な成金より断然高いと思うね。」

「光栄なことだね。」

「…… 大食いウンジャク。」

「そんなことより早く食べなきゃパティシエに失礼なのだね。」

宝物の前では善人に対する大岡越前より寛大になるらしい。

普段はウンジャクって呼ばれるとターボライターのように怒り出すくせに、今はこちらに視線を流しもせずに雲雀はナプキンを首元に垂れた。

ナイフとフォークとスプーンを同時に装備した無邪気で貪欲なその姿は征服者。

皿という土地の上に芸術といえるほど精緻にくみ上げられた数々のデザートはあっけなくあっという間に圧倒的に雲雀の胃の中に吸い込まれていく。

ヴァイキングは暴食だったという。

彼女にはその血が流れているのかもしれない。

幸せそうにイチゴに生クリームを絡めている雲雀をみてそう思ったとき、不意に彼女は視線を上げた。

そして俺を見るなりその整った柳眉を歪め、持ち上げた。

「なにかおかしいの？さっきからニヤニヤしているのだわ。」

ああ。と。

そして気付いた。

「いや、ホント美味しそうに食べるなって、さ」

照り輝くイチゴが乗った小麦色のパイ生地を削り取り、口に運んだ。

わずかな酸味が絶妙なバランスで全体の甘さを引き立て、味を引き締めていた。

「ん、うまい。」

「こゝも、美味しそうに食べているわ。本当に美味しそうに。」

怪訝そうに歪んでいた眉毛がゆっくりと穏やかな弧を描く。そして、雲雀はまた征服にとりかかった。

まもなく。

そして確かに運び込まれた大量のスイーツはそのすべてが運び込まれた十五分よりもやや短い時間ですべてが更地になった。

「幸せだわ。今なら死んじやってもいいかもしれないくらい。」

「バカ言つなよ。それにどうせ十分もしたら次の甘味処にいくたがるだろ？」

「ひどいこと言うわ。私そんなに食い意地を張っていないわ。」

「二時間ほど前にその言葉をいうべきだったな。」

「それも、そうだね。」

さっきまでで平らげたものを思い出したのだろうか。
んん、と唸り視線を宙にめぐらしてから、悪戯っぽく雲雀はくすくす笑い出した。

それを見やり、思わず俺も苦笑した。

「おお、やっぱりヒバリじゃない力！」

不意に背後から投げかけられたのはハスキーボイス。それも、やは

りカタコトのそれだった。

「クルウセ！！久しぶりなのだわ。」

雲雀は勢い良く席を立ち、両手を広げていたクルウセに抱きついた。

褐色の肌。

漆黒の髪が、忘れられたように真っ白な長いコック帽とスーツに浮かび上がっている。

しっかりと清潔感を感じるものの、どこか、その着こなしはピザ職人のママさん。もしくは大家族の肝っ玉母さんといった雰囲気があった。

目を引いたのは雲雀の背に回されたその黒い手。

重労働をしているように皮が厚ぼったい様子だ。

ただ、キメは細かいという不思議な魅力がある手。

親父に叱られた幼い日に、泣いている自分に差し出されたお袋の手を彷彿とした。
なるほど、数々のスイーツはあの手によって作り出されているのだらう。

長さが五十センチに至ろうかという長いコック帽は、パティシエの長であることを物語っているようだ。

やや長く尖った耳が帽子にかかっていた。

三角形に帽子の側面が切り取られたように見える。

彼女はカテゴライズされたクローン。

一つの分野に適応、順応、そして発展させるように《調整》されている通称《ユーズ種》のようである。

「今日のスイーツも、どれも、すばらしかったわ。」

「うれしいコトしてくれるナ。ヒバリは。」

「一つだけ気になったのはタルトに使われていたブルーベリーがいつもと違ったのだね。」

「まいったネ。ヒバリにはバレた力。仕入先を変えることになってしまっただけ。トコロデ。」

彼女、クルウセは所在無さに立ち尽くしていた俺のほうに向き直り、そして改めて交互に雲雀と俺を見つめた。

「彼は、ヒバリのいいヒトなのかな？」

「ええ。何度かいつしよに来ただけけれど、二人はきょうが初めてね。こー？」

「あ、ああ。どうも、齋井高道です。どれも、うまかったです。」

「こーはお世辞を言わないの。さっきも、本当に美味しそうにこのスイーツを食べていたのだから。」

「そう力そう力！」

満面の笑みを浮かべたクルウセの顔には深い笑顔の皺が刻まれている。

クローンにはつきりした年齢を当てはめるのは難しいが、三十前後のように見える快活な笑顔だった。

「ヒバリには良くキてもらってるんだ。コウ。これからもヨロシクだよ。」

雲雀にしたのと同じように彼女は両手を広げて見せた。

わずかにためらった俺に、むう、シャイな力？とつぶやいてからおもむろにクルウセは抱きついてきた。

豪快に、存外強い力で拘束され、鼻の奥にしみ込んでくる様に、甘い香りと、ふっくら焼きあがった生地の香ばしいニオイがした。

「まあ、ほどほどには。」

俺の平生の返事に一瞬目をむいてから豪快にクルウセは笑い飛ばし、雲雀は。

「もう少し、何かないのかしら。気を悪くしないで欲しいわクルウセ。こーはいつもこうなのだわ。」

「そうかそうか！」

クルウセはというと、別段気分を害した様子もなく、再びからからと笑っていた。

その帰り道のことだった。良く食べ、良く遊び日が落ちてからだった。

俺はいつもより胸に温かい気持ちを抱いていたのに。

いつも口を突いて出てくる言葉は皮肉しかないのだけれど。

別れ際に珍しく雲雀に感謝の言葉を言おうとしたとき。

雲雀は、暴走してきた車に勢い良く撥ね飛ばされたのだった。

第二話

/

胸を病んだような感覚がする。

息をするたびに吐き気を伴い、断続的な頭痛で目の前が光って見える。

まるで、走馬灯のように雲雀と出会ったときのこと、雲雀と付き合いのことになったきっかけ、喧嘩したこと、笑ったこと、彼女が泣いたこと。

さまざまなことを思い出し、そして、今日を振り返った。

ふざけんな。『走馬灯』だと？なんでそんなことを…。

蛍光灯の光にあわせて、耳鳴りに似たほんの些細な羽虫のような音が鳴り続けている。

それに、雲雀に同乗した救急車のサイレンの名残が時折混じる。

思考を振り払うために二度頭を振った。

振動で、ギシリと、浅く腰掛けている革張りの長いすが悲鳴を上げた。

雲雀を轢いた車はそのまま走り去った。わずか数秒だけ減速したもの、一度も、止まることはなく。

まるで夢を見ているようだ。そう、夢を見ている途中で、コレは夢なんだって気付くような。

すべてが曖昧に翳んでいて、四方の白い壁は歪み俺を押しつぶしにかりそうだった。

雲雀の両親は早くに亡くなっただけらしい。
その話は以前聞いて知っていた。

だから、俺のあい向かいに座っているのは雲雀の伯母に当たるとしき恰幅のいい初老の女性と、それに寄り添うように立ち続けている旧式のクローン乳母だった。

その証明にとりわけ長く後頭部の方向へ突き出した尖った耳に、個体認識の為のピアスが二つついていた。

整った顔立ち、見たところ二十〜二十五歳位に見える。

劣化しないように調整されているようだ。

見た目こそ若い、恐らく、あのクローン乳母は昔雲雀の世話をしたそれだろう。

小母さんから微かに届く香水の香りに、酷く神経を逆撫でされた。

一体何時間たったのだろうか。

じつと見据える先、赤色に白抜きで『手術室』と書かれているライトの光が、消えた。

すぐにながちり、と手術室のドアが開いた。

執刀医は薄緑色の手術服に身を包み、顔の大部分をマスクで覆っていた。

その隙間からは浅黒い肌と耳、黒い瞳が覗いている。

「雲雀はっ…！」

それ以上の言葉は出てこなかった。

マスクに隠れた、そのユーズ種のクローン医師の表情は察することが出来なかったから。

楽観も悲観の言葉も、喉で止まってしまったのだ。

「もう、ヤマをこえまじタよ。損傷の激しかったゾウキに人工のソレヲ組み合わせての手術ということになりマシタ。しかし。」

そこまで話し、そのクローンはすい、と目を細めてから口元を覆うマスクを取り外した。

マスクをはずして尚の鉄面皮。

医師としては、それは正しいのだろう。

しかしその中性的に見える整った顔立ちは、尚更冷徹な印象を俺に与えてきた。

いつそのこと、マスクをはずさないでいてくれればよかったと思うほどに。

同時に、視界の端でクローン乳母が胸の前で、祈りをささげるように手を握りあわせ、うつむいたのが見えた。

「しかしってなんだよ！」

「意識が戻るマデ、どれほど時間がかかるか…早くて数時間後には目を覚ますカモしれませんが、長けレバ…半年、一年トかかってしまふカモしれません。もしくはもっと…」

「嘘…だろ？なあ、あんたユーズ種だよな？執刀に特化したクローン医師なんだろ？何か、何か方法はねえのかよ！」

更に一步、そのクローンにちかづこうと足を踏み出した——つもりが、力が入らずよろめいてしまい、後ろに倒れそうになった。

「っう、」

その俺を支えたのはクローン乳母だった。

今にも泣き出しそうな顔をしているくせに、視線だけはクローン医師のほうを真っ直ぐと見つめ続けている。

俺には、とても。

怖くて出来そうに無い。

夢だと思った。

そのくせ、ぼんやりした頭に追い討ちのように綴られた医師の言葉はしみこんできた。

雲雀を元のようにすること自体はそれほど難しくはない。

しかし、そのために必要なファクターが複雑に絡み合っている。

つまり、目を覚まさないで一年、二年と日々を重ねていくことによる体力の低下は、複数損傷を受けている臓器の移植の際、手術に耐

えうるだけの体力をどんどん衰えさせる。

そして、臓器の提供者を見つけ出して移植できるとしても、多臓器移植のため一度にすべてを移植する、というわけにもいかず、一度の手術からある程度の間隔をあげなければならない。

さらに必要な臓器の提供のそのすべてがスムーズに行くかどうか也正直分らないという。

「統計的ニハごく親密なカンケイの人物による呼びかけが、回復に才きな効果を期待できマス。兎に角、意識が戻る力否かが、回復への大きな鍵になるでしょう。」

クローン医師は軽く会釈をしてからカツンとくつを響かせた。

同時、それによって夢から引きもどされた俺の頭に一つの考えが浮かんだ。

「なあ！雲雀の臓器を培養してそれを移植すれば……」

カツン。

わずかな温かみと清潔感を感じさせるクリーム色の通路に、にべもない冷たい音がこだました。

クローン医師は半身で振り返り、ゆっくりと二度、頭を振った。

「コレ以上、患者さんからゾウキヲ採取するのは難しいデス。それ

に、認可が下りて臓器の部分培養するには現在でも年単位の時間がかかってしまいマス。」

止めだった。

言葉をナイフとしたならば、俺は一縷の望みに手を伸ばしたためにより深く、より大きなナイフを心臓に突き立てられたのだった。

その後、雲雀は病室へと移動された。

横になっている雲雀は顔色が悪いものの、やっぱりいつもどおりの彼女だった。

「少し風邪を引いちゃったのだわ。」

昔見舞いに行ったとき咳をしながら持って行ったケーキに嚙り付いていた彼女を思い出した。

だから、余計に、雲雀がピクリとも動かない姿を見るとどうしようもなくなる。

ここには微塵も、現実味がないのだから。

「ごめんなさいねえ。娘を迎えに行かなければならない時間だから

私は戻らなくちゃならないの。雲雀ちゃんのためにフォン……このクローン乳母を置いていくから……」

小母さんはそういい、しばらくしたら娘が云々と言いつきがましい言葉を繰り返して帰って行った。部屋にはクローン乳母フォンと雲雀と俺が残された。

窓からふわりと吹き込んでくる風が、純白のカーテンを柔らかく揺らしていた。

ただ、時間だけが過ぎて。

「雲雀、おい雲雀、…この……ウンジャク。」

雲雀の頬を指で突つついてやる。

ぷにいつなんて簡単に指は頬にめり込んだ。

日は、傾いてきている。

フォンはさつきから（というより小母がいたときからずっと）無言のまま、あれやこれやと雲雀の身の回りの世話をしている。

「明日は『永久堂』の絶品イチゴ大福を食べに行く約束だろ。目、覚ませよ。」

もう、面会終了時間は近い。

「一番乗りして、後ろの行列が殺気を向けてくるのを無視して、全部お買い上げするんだろ？もう、戻らなきゃ明日に響く。」

風が、冷たくなってきた。

フォンが察したのか窓を閉めた。

「……………なあ。」

「齋井さん、そろそろ……」

いつの間にか薄ピンク色をしたナース服を身に纏った看護師がやってきていた。

どうやらもう面会は終わりらしい。

「はい。」

高道は最後にもう一度雲雀の頬を突つついた。そして名残惜しそうに握っていた手を離す。

「また、明日な。雲雀。」

返事はない。

無意識に、拳を握り締めていたことに気がついた。

小さく深呼吸してその手を緩め、ゆっくりと、雲雀に背を向けた。

その夜、警察から連絡があった。

雲雀を引いた犯人が自首してきた、とのことだった。

その犯人は、『クローン』であるらしかった。

第三話

/

おとなしく眠っていることなんて出来るわけがない。

病院から家にたどり着きすぐだというのに、兎に角そのまま車を飛ばした。

無論、向かうのは連絡があつた警察署。

十五分ほどして到着。

建物を見上げると、昼は清廉潔白の象徴のように白い署は、夜の闇に侵食され濃紺に染まっている。

規則的に並んだ窓から漏れ出したヒカリは闇を振り払っているように見えた。

足が、俺のすべてを支配しているように警察署へと向かい歩き出した。

正面、二重の自動ドアが開き入ってすぐ右側の受付で事情を話す。

無駄にまだるっこしい事務的な態度にイラつき、やや、説明の聲に熱がこもったらしい。

二十代後半くらいの比較的若い警察官はちらりと、同僚に話しかけたときに肩をすくめているように見えた。

まもなく（といっても無駄に長い時間を待たされた気がしてならぬのだが）先ほど警察署を見たときに思ったそれよりも更に深い紺色のスーツを纏った鋭い目つきの女性が出てきた。

綺麗な人だった。見た感じだと二十代後半から三十代前半くらいだろうか。

長い黒髪を後ろで一本にしばっている。

やや三白眼風の鋭い目つきはこちらに向くなり一瞬だけ更に鋭く、そして不愉快そうになり。

「こんばんはあ。あなたが阿佐美雲雀さんの…彼氏さん、ですか？」

一転、柔らかい笑顔を浮かべて軽く頭を下げてきた。

「……………齋井 高道です。」

「では、改めまして、私は三崎^{みさき} 悠^{はるか}というものです。私の担当となつた今回の事件についての説明、ということなんですが…そうですね。立ち話というわけにもいきませんから、こちらのほうへどうぞ。」

と、彼女は俺を先導し、一つの部屋へと入っていった。

そつ『取調室』と銘打たれた個室に。

彼女は重々しい鉄製の扉を手で開き続けるのが億劫なのか早々に三角形のゴムを床との隙間に咬ませていた。

——なんだよ、取調室って。

三崎は看板を不愉快そうに見上げている高道に気付き、参ったように破顔した。

「いや、あれなんですよ。大体、警察にいらした方々との話というものは酷く個人的な秘匿されるべきものであるので、不特定多数のいる場所で、というわけにもいかないでしょう？」

そういうと、招き入れるように手を、相向かいの机の奥側に設置されているパイプ椅子に向かって伸ばし、三崎さんはその三白眼で俺を見つめてきた。

どこか、品定めをされているような気がして俺が慄然とした雰囲気を表に出しそうになったとき。

「『取調室』とは書いてあるものの、ここは同時に『相談室』でもあるのですよ。」

皆さん気になるみたいなんですよね。我々は慣れてしまっているの……気をつけなければと思うのですけれど。

と、困ったように笑い、ドアノブを押さえドアに咬ませていたゴムをはずした。

「では、どうぞ。」

「……、はい。」

改めて、すすめられるままに奥のパイプ椅子に腰をかけた。

長年使われているらしいその椅子の綿は酷く硬くて、まるで鉄の上に皮一枚敷いただけのものに座っているようだ。

酷く息苦しく、当然窓もない部屋を外界と隔離するように重たい金属音でドアが閉まる。

途端に室内の空気は数倍も硬くなった気がした。

この『取調室』にあるものは俺たちが今座っているパイプ椅子一つ、三崎さんが座る少し良い黒い皮張りの椅子、部屋の奥側、俺の座っている後ろにあるこれまた鉄製のファイルがぎっしり詰まった本棚。そして正面の無骨な机一つ。

白い壁紙は年数によりかすかにくすんでいて、小学生などが描いたらしき防犯ポスターの大賞が印刷されたものが年代別にいくつか貼られていた。

無駄に黒と赤が使われているものが多く、黒い人影に赤く口が裂けたデフォルメの犯人像が視界の隅でやかましい。

ドアを開く音を聞きながら視線を落とすと、机の上に敷かれたクリアシートの下には年号と西暦を合わせて年齢を確認できる一覧表な

どが入っていた。

「あれでしょう？たぶん刑事もののドラマなんかで出てくるような鉄格子がある部屋を想像していたんでしょう。そんなのは留置場くらいなのよ？」

周囲を見渡して、どこか自慢げに彼女はふわりと向かいに座った。緊張をほぐそうとしているのだろうか。

でも今は…。

「……ここも、似たようなもんですよ。」

「うん。」

周囲をゆっくり見渡して、三崎さんは曖昧に笑って、椅子に深く座りなおしていた。

「そういわれれば、味も素っ気もないものねえ。ここは。にしても、取調室に通されたことを怒っているの？」

「いえ。別に。それよりも…。」

「そう、ね。ごめんなさい。もう晚いものね。」

やっと三崎さんは書類を取り出した。

そして、確認するように机の上に広げ始める。

「今回の容疑者は最新型のクローン執事。名前がラン、雄型。所有登録者が伊藤柳太郎（46）とその妻、伊藤恵（43）そしてその一人娘の伊藤広海（14）。」

カサリと音がして顔を上げると、三崎さんは次の資料を手にとっていた。

続けて紡ぎ出されていく言葉を受けて、俺の胸の中心には一本の針が生まれた。

「最新型として契約登録されて今日はおよそ一ヶ月らしいです。ラボから出てきてまだ二週間と少しだと。雲雀さんが、彼の運転する車に撥ねられた。これは広海さんを塾へと送った帰りに、余所見をしていたため起こったとのことです。」

針は、二本、四本、八本、十六本とあっという間に倍々に増えていき、俺の内側の臓器をずたずたにして、皮膚の一枚下すぐまでぬめるどろどろした液体へと破壊しつつ、体中を侵食していった。

「彼は酷く動揺したみたい。それはそうね。私たちでも事故を起こしたらあわててしまうもの。それを、彼は調整されているとはいえ、外界に出てすぐに事故を起こしてしまったのだもの。」

トリシラベシツには、衣擦れと紙の音、そして三崎さんの声だけが響いている。

きりり、と音が鳴ったのは、俺が強くかみ合わせる歯がかすかにずれた音だったんだろう。

「そして彼は動揺した勢いで減速後すぐにアクセルを踏み込んだ。登録者である彼の主人に事情を説明して指示を仰ぐために。彼はすぐに家にたどり着いた。といつても事故現場から二十分ほどかけてですが。そして事情を説明し、彼の登録者である伊藤柳太郎氏とともにこの警察署へ自首してきた、というわけです。」

資料に向けられている三崎の目は鋭い。

その三白眼の通り、さしずめ獲物を狙う猛禽の様な色をしていた。

そして、クローン医師がそうであったように、その表情はかたまっていた。

次々に現状での細かい状態説明、時刻の分析、その他もろもろのこととがその口から流れだしていた。

しかし、後半部については飲み屋のどうでもいいバックグラウンドミュージックのように右から左、まったく頭に入ってこなかった。

そんなことよりも真っ先に、念頭に、ずっと、強い強い思いがあったからだ。

「……ということですね……」

「もういいです…！」

勢い良く言葉を遮り立ち上がった俺を、三崎さんは面食らったように見上げていた。

倒れかけたパイプ椅子の縁が鉄製の本棚とぶつかり合い、硬い金属音が響き渡ると、三崎さんが手に持っている書類は怯えた様にだらしなく、上半分がこちら側にお辞儀した。

「…はい。」

「それよりも今！そのクローンとは、ランには会えるんですか！？」

わずかに、自分でも言葉に怒気が籠もってしまった事が分かった。ただ、冷静でいる気も、また冷静でいられるはずもないことも、端から分かっていた。

「…ふう。——率直に言うならば、それは無理です。」

「なんで……」

「なんで、といわれましても、そういう決まりなんですよ齋井さん。」

「

とんとん、と軽い音を響かせて、三崎さんは書類を机でまとめて、改めて机の上におきなおした。

「そのクローンのせいで雲雀は…」

その続きをいえなかった。

その言葉が、もっとも不吉な予言となつて、未来を決定してしまう気がしたからだ。

そして、その言葉を受けて最初にそうしたように、三崎さん是不愉快そうな、痛みを覚えそうなほど尖った視線を俺に向けた。

「クローン、クローン、ですか。いえ、クローンじゃなくても、例え今すぐ彼があなたと会う準備が整っていたとしても、今のあなたと彼をあわせることなどではしませんよ。」

「なんでだよ!!!」

高道が拳を振り下ろし、机を叩いた鈍い音が密閉された空間を揺るがした。

今度はひるみもせずに、三崎は深く、椅子に座りなおす。

「会つて、どうするのです？殴るのですか？それとも雲雀さんにしたように車で撥ね飛ばすのですか？それとも…」

たつぷりと一呼吸の間。

そして、三崎は口を開く。

憐れみとも、侮蔑とも取れるような尖った視線を高道に向けて。

「殺すのですか？」

「——っ！」

「人を殺した、もしくは重大な事故を起こした容疑者は、被害者と親密な関係を持つ人間と、すぐすぐ直接会わせるわけにはいかないのですよ。雲雀さんの容態についてはこちらも聞いています。齋井さんの心中、お察しします。ですが、齋井さん。ランは容疑者でありクローンであるけれども、それよりもまず、彼には人権があるのです。『私たちと同じ』人権が、です。だから、私たちと同じ正しい手順によって、そして正しく法によって彼は裁かれなければならぬ。ここで、あなたが彼に手を出すことは、まったくの筋違いなのですよ。」

まして、あなたは今、私の言葉をすぐに否定できなかったでしょう？

付け加えるように彼女はそういい、その目の鋭さを解くとゆっくり頷いた。

拳は強く握り締めたまま、俺を支配していた足が勝手に麻痺してしまったみたいに折れた。

倒れ掛かっていた椅子が軋みをあげて、浅く、へたり込んだ俺を支えた。

「私がいつのもおかしいかもしれませんが。雲雀さんが目を覚ましたときに、齋井さんは、それで彼女が喜ぶとお思いなんですか？」

——警察署からどうやって帰ったのかは覚えていない。

最後の言葉が、いや、三崎警察官の言葉が頭の中でずっと繰り返し聞こえ続けている。

とにかく、家に着いたところにはもう日付が変わってしまっていた。

雲雀が元気で、…幸せで。

そして今のように、俺の中に今まで生きてきた間のすべての感情よりも濃い感情の起伏があった一日は、何の変哲もなく、静かに過ぎ去っていた。

とても、眠れやしなかった。

眠らなければ、と思って酒を煽ってみてもまったく酔いもしない。

眠気なんて、やはり微塵もない。

今思えば、さつき警察署に行かなければ、三崎警察官の言葉を聞かなければ、俺の胸に湧いた一つの思いに気付かなければ——まだ眠ることも出来たのかもしれない。

しかし、その浮かんできた思いは、俺の中にあつた、たつた一つの想いによって生まれてきたんだということは分かつていた。

だからこそ、雲雀には元気になつてもらわなければダメだ。

どうせ眠気なんて訪れないのだから、パソコンを立ち上げて片っ端から調べて回った。

臓器移植について。

また、俺と同じような立場の人間たちが情報交換を目的で立ち上げているサイトについて。

移植の技術が最も優れている国内外の病院、医師、その他なにか役に立ちそうだと思ったすべての情報を。

目ぼしそうな医療関係の本を調べ上げてリストを作り、印刷してみたりもした。

外が明るくなってくるまで、ずっと。

暗闇でモニターを見つめ続けたせいか、もしくは……。

高道の目からは一筋、窓のカーテンの隙間から差し込んだ朝日を反射する光があった。

「朝、か。」

服の袖で目元を拭い、高道はパソコンを終了させる。

すぐにシャワーを浴びて着替え、一日の準備を始めた。

一年目で地獄の単位取りをしてあるので、二年目の今年は授業がかなり楽だ。

今日も十時に家を出れば良いくらいである。

『永久堂』が開くのが八時。学校に向かうのは雲雀に絶品イチゴ大福を届けてからでも十分、間に合うだろう。

高道は荷物をまとめて、車のキーを取り出し、家を出た。

霧雨が降っていたのだろうか。
気がつかなかった。

かすかに濡れたボンネットに反射した朝日が、
いたく眩しかった。

第四話

/

長く家で使われていたものを引つ張り出して持ってきたのだろう。ポットは天辺の部分を押し込むたびにかな悲鳴のような音を出して湯を吐き出している。

俺がイチゴ大福を持って見舞いに来るなり、フォンは軽く一礼し、イチゴ大福を受け取ると茶を入れ始めた。

やはり、手馴れているのだろう。

よどみない動きですぐさまお茶と皿に乗った大福が出てきた。

「フォン、君の分もある。それと雲雀にも、お茶を頼む。」

そういうと、フォンはかすかに微笑んで頷いた。

俺は雲雀の横の白い台の上に俺と同じものが出されたのを確認してから、一口茶をすすった。

喉から食道を通じて胃へ。ゆっくりと熱い塊が降りていくのがはつきりと分かった。

それが、広がって消えた頃、俺と雲雀の皿にそれぞれ二つずつ乗っ

ているイチゴ大福を、一つ、雲雀の皿へ移動させる。

「今日、な。『永久堂』にいつてきたら、大きく張り紙がしてあったんだ。和紙で作られている趣のある張り紙でさ。そこに、なんて書いてあったと思う？」

たつぷり、返事に必要な時間を置いてから、もう一口、茶をすする。

「さすがにわからねえか。来週の火曜に、新作の和菓子が発売されるらしい。蛍火だとかいうやつでな。見本がおいてあった。水饅頭みたいに透き通った真ん中に、ほんのり淡い色がついた餡みtainのがはいつていてさ、美味そうだった。」

淡い桜色の大福には、『永久』という達筆な焼印が入っている。

手を拭いてから、それを手に乗せた。なぜか、今日はいつものそれよりも、重く感じる。

「一日限定三十個って書いてあったから早く行かなきゃすぐ売り切れちゃうと思うぞ。まったく……講義、またサボることになりそうだな。」

自分の言葉で苦笑して、一口、大福をほお張った。

もちの歯ごたえ。

そのあと餡の懐かしいような優しい甘さが来て、租借するとイチゴの果汁が、際限なく広がっていく餡の味の端をちょうど良い塩梅で引き締める。

邪道だという人もいるが、イチゴ大福を考え出した人間は本当に、偉大だと思う。

「ん、うまい。」

昔は、餡が大嫌いだった。

飲み込むときに執拗に喉に詰まるような、質の悪い蜂蜜の濁った部分みたいに澱んだ甘ったるい味がたまらなく嫌いだった。

もつとも、食べてみたら永久堂のそれはそういう餡ではなかったが。

そういえば、雲雀と最初に食べた甘味は、このイチゴ大福だった。

/

大学に入ってすぐの頃、お世話になっていた叔父の妻、つまり叔母が亡くなった。

少し歳の離れた俺のいとこ、天田幸樹夫婦にはまだ小学一年生の息子―俊樹君がいて、共働きの天田夫婦は家に一人で残すわけにいないと叔父のもとへ預けていた。

自営業で未だに家を空けることが多い叔父は、初孫の可愛さといえども俊樹の世話を叔母に任せることが多かったらしい。

流れて、講義がない昼間に叔母の代わりに俊樹の世話をすることになった俺は、しかし単位を詰め込んでいたために大学の近くの広場

で俊樹の相手をする事が多くなっていた。

雲雀と始めてあった日。

その日は、俊樹と自転車に乗る訓練をしていた。

目が大きく、やや垂れ目の優しい顔立ちの俊樹は、その見た目の通り少し内向的で女の子みたいによく泣いた。

何でも、自転車に乗れないのを馬鹿にされたとかで、その日は俺の服を引っ張り倒して自転車の特訓をせがんできたからだった。

俺に言わせれば、別にまだ自転車なんて乗れなくてもいいだろうに、とも思っただが、断る理由もない。

クンレンに付き合うことを決めたとはいえ、すぐに乗れるわけなんてない。

補助輪をはずして、俊樹が乗る自転車の後ろを押さえてバランス取りの練習をしていた。

「手、離さないでね、絶対だからね。」

「離してないから。だからトシ、もう少し前向け前。」

「うわわっ」

さりげなく手を離して何度目か盛大に転び、そのたびに目の端に涙をためてこちらを睨みつけてくる俊樹の視線をやり過ごして、まただましまし自転車に乗せ。

一体何度目になるのかわからないくらい転び倒した後、ふらふらとしながらも俊樹が一人で進みだしたとき。

「お…？おおお！？乗れたぞトシ！でかした！…ってアブねえ！ブレーキ！」

声もむなしく、なだらかな坂道の勢いで植え込みに突入し、そのまま俊樹は盛大に木に突っ込んでいた。

後は烈火のごとく泣き喚き、どれだけ慰めても、今自転車に一人で乗れていたのだぞ、と褒め称えても一向に泣き止まなくて、途方にくれかけたとき。

偶然、散歩していた雲雀が来たのだ。

黒く、長く、しなやかに腰の辺りまで伸びた髪と、闇夜にぼっかりと浮いた満月のように白い肌が目に焼きついた。

「ほら。大丈夫なのだよ。」

（……だわ？）

彼女はハンカチを取り出し、俊樹の涙を拭ってやって、そのガラス細工みたいな手でかすかに赤くなつた額を撫でていた。

「大丈夫。」

一つ、目を合わせて彼女が頷いただけで。後は何をしたでもなく、うそみたいに俊樹のやつが泣き止んだ。

「……うん。だいじょうぶ。」

まだ、かすかにスンスンと鼻を鳴らしながらも、彼女のそれに合わせて一つ、俊樹は頷いて、そして、ぺかりと自分がぶつかった木に復讐のけりを入れた。

「コラ。」

それを見て、急に彼女は眉をきりりと吊り上げた。

そして指を一本、空に向けてぴんと伸ばしてから、それで俊樹の額をつん、とつつく。

「あうっ!？」

何が起きたか分からないといった様子で、また泣き出しそうな俊樹は彼女を見つめた。

「木にぶつかって、おでこ痛かったんでしょ？」

「う、うん。」

「じゃあ、きつと木も痛かったんだから、そんな事しちゃダメだわ。ほら。」

俊樹の視線を受けて、再びその指は真上へ。そして俺たちの視線も指の先、さわさわと風になびく木の枝葉へと向いた。

「痛くて泣いているわ。だから…」

また、雪解けみたいに優しい笑みを浮かべて、彼女は自分がつついた俊樹の額に、またその手を当てて。

「謝らなきゃ、ダメだわ。」

それは、子守唄みたいに優しい言葉だった。

「うん。…ごめんなさい。」

ぺこりと、素直に俊樹はぶつかった木に頭を下げていた。

「いい子だわ。」

——なんていえばいいのか。

見方によればそれはひどく、滑稽な光景だった。

だって、彼女は木にぶつかって泣いている子供を慰めて、それで木に謝らせているんだから。

普通の人だったら、たとえば、彼女の位置にいたのが他の誰かであつたなら、木のことを心配なんてするのだろうか。

俊樹が今のように、たとえ木といえども何かを思いやる優しい気持ちに気付けたのだろうか。

たったコレだけのことに、俺は彼女を、彼女自身の本質を見た気がした。

だから、なのかもしれない。

「あ…ありがとう、な。助かった。」

「んーん、そんなたいしたものじゃないのだね。じゃあ、気をつけてあげてね。」

「あ……おい、ちょっとまってくれ。……少し、時間あるか？」

さらりと去ろうとした彼女を、引き止めたのは。

/

その後、永久堂の二階で山のような和菓子を並べ立てて幸せそうに食べまくりやがって、俺の財布への優しさなんて微塵もなくて、見解を最初のそれから百八十度変えて。

それでそのときに、なし崩し的に食べた嫌いなイチゴ大福が、実はうまいものなんだって知ったんだったか。

雲雀の皿には、まだ三つのイチゴ大福が乗っていた。

お茶はそろそろ、冷たくなっているだろう。

「講義の時間になっちまった。雲雀、約束忘れるなよ。朝一番だからな。寝坊したらゆるさねえぜ？」

フォンは静かに一礼し、俺の前から皿を下げた。一言礼を言っ、雲雀に振り返る。

「また、来るから。」

最後に一度、手を握ってから。俺はまた病室を後にした。

講義の時間、買いあさった本を読み漁り、そして空き時間にバイトを探して電話を掛け捲った。

当然、雲雀の手術には莫大な金が必要だった。

力仕事で短時間のものを三つ、面接の約束を取り付けて、雲雀に会いにいき、そして家に帰る。

パソコンを立ち上げ、目ぼしい情報を探しながら片手で臓器移植の関係の本を読んでいたら、いつの間にか、意識は途切れた。

限界を迎えたからだが弛緩し、泥のように眠りについた高道の腕から、本が落ちてぱらぱらとページがめくれ上がる。

偶然開かれたページに書かれていた見出しの一つには、こう書かれていた。

第五話

/

追い立てられているような焦燥感が常に背中に張り付いている。

一日、一時間、一分、一秒、今まではたまにしか固執しなかった、そんなわずかな間さえ、無駄にすることは雲雀の命を無駄にしているような気がしていた。

いや、気がしているだけではなく、実際にその通りなのだということも、分かりきっていった。

一日の始まりには新聞配達をし、それから短時間の力仕事のバイト。

大学の講義もそこそこいろいろな医療関係の本を読み続け、講義が終わるとすぐに雲雀の見舞いへと大学を飛び出した。

雲雀といったいろいろな店の菓子を買い、そしてどこそこに新しく甘味どころが出来ただの、以前デートで行ったところに新しい商品が出るだの事細かに説明した。

雲雀の叔母とは、どんどん顔を合わせなくなっていたが、フオンは一日も欠かさずに雲雀に付き添っていた。

その理由は俺のほうにあったのはわかっている。恐らく、時間をあえてずらして見舞いに来ているのだらう。

雲雀の横にバラやガーベラのアレンジメントがたまに置かれていたのは、その小母さんが持ってきたものなのかもしれない。

強い香りではないものの、ふわりと香るそれは、雲雀が戻ってくるときに少しでも頼りになるような気がした。

毎回買っていく見舞い品を受け取り、やはり無言のままフォンは俺と雲雀の分のお茶を入れた。

雲雀の叔母のそれと同じように、俺を拒絶することは容易だったんじゃないかと思う。

ただ、フォンは無言で、やはり俺と雲雀のお茶をいれ、しきりに俺の横で雲雀の世話をしていた。

病院の面会時間いっぱいまで、他愛ない話、甘味の話、大学ではどんなことがあった、だのという話題を続け、最後に次のデートの約束をして家に帰る。

すぐさま深夜帯にかじる短時間の力仕事のバイトをこなし、日付が変わってから家に帰り、やはりインターネットや本を読み漁っているうちにいつの間にか死んだように眠りに着く。

雲雀が隣にいなくなりすでに三週間。

それが、いつの間にかサイクルとして確立してしまっていた。

あの日、偶然開いていた本の見出しを見て雲雀を助けるための最短の道は分かった。

その最短の道が、茨で出来ていることも。

当然、クローン乳母を家族として迎えている雲雀の叔母が、俺に嫌悪を抱くのは分かっていた。

当然、以前の俺がそうであったようにクローンに多少なり思い入れがある人達は、恐らく今の俺を憎憎しく思っているのだろう。

しかし、ためらいはなかった。

そのときの俺にはそれしか残されていない気がした。

どんなに考えても、どんなに俺が躍起になってもなかなか進展しない雲雀の手術状況を前に。

歯を食いしばり自分の無力さを噛み締め、血が滲むほど拳を握り締める日々を思うのなら。

一縷の望みにかけて胸に深々と怨嗟のナイフを突き立てられるほうが、よっぽどマシだったんだ。

だから俺は、あの日、反クローン人権団体に入る決意を決めた。

『クローンに恋人を轢かれ、その恋人は植物状態。そして彼女を助けたいからクローン人権に反対だ。』

俺がこの団体に入った理由は酷くシンプルだった。

そして、大衆に向けてのメッセージとして最も、‘受ける’、理屈だった。

多少なり個々の複雑な思いが形を成して出来上がっていたこの団体といえ、その本質は『差別』という事実は否めなかった。

だからこそ、なのだろう。

俺のその道理はまるでその団体の元からある総意であったかのよう

に大々的に取り上げられ、この三週間でこの団体は今までの二倍近くの規模にまで拡大した。

俺が週に二度の小さなスピーチを繰り返すだけで、五度のスピーチをしただけで、である。

これは事実上、日本における最大規模の反クローン人権団体となったという意味だった。

世論を塗り替える起爆剤として、見え隠れするこの団体の存在理由、その薄汚れた部分を隠す隠れ蓑として、俺が利用されているのはわかっていた。

しかし、俺はそれでもいいと思った。

——いや、そのためにこの団体に入ったのだから。

そして、明日。

俺はテレビの前に、日本中の人に対してのメッセージとして、反クローン人権のスピーチをすることになっていた。

/

うれしくもないことにかぎなれた、薬特有のにおい。

院内に満ちている負の空気。

健康な人間も通い詰めればどこかが悪くなってしまいそうな、淀みが病院にはある。

俺はスピーチを前にまた、そして大学をサボりいつものように見舞いの品を買い、雲雀のもとに来ていた。

病室にたどり着くまでに、背中を丸めて診察を待つ人達を、しずしずとどこかへ向けて歩いている入院患者をみた。

風邪をひいただけの人は今日、ここを去るんだろう。

骨折しただけの人は直り次第、退院するだろう。

手術が必要な患者も、手術を終わらせれば退院できる。

じゃあ、雲雀はいつたいいつになったら……

かぶりを振る。

弱気になるのはまだ早い。

今日は、まだ。

雲雀の居る病室のプレートを一瞥。貼り付けられているナンバーを確認して、深呼吸を一つ。

いつものように、いつものように。

病室に足を踏み入れると、そこにはクルウセがいた。

和製ポンチョのようなものを身にまとい、一人、メイド服のままのゴッデス種のクローンを連れている。

雲雀の横に二人でちょうど座ろうとしているところを見るとまさにたった今見舞いに來たのだろう。

足が止まる。

俺の周りには、それでも今まで優しい人間しか居なかった。

だから、きつと。

一瞬足が止まったのは、クルウセが自分にどう反応するかが、怖かったからだ。

病室の入り口に数秒立ち尽くしていた俺にまず気付いたのはフォン。彼女もわずかにためらったように視線を泳がせてから、静かに、用意した椅子を手で示した。

その動きに気付いたクルウセは振り向き、俺を確認すると黙って雲雀へと向き直る。

これから足を進める先、雲雀の横の椅子に座るだけのわずか数メートルには、幾万もより合わさった茨が敷き詰められている気がした。

俺は、小さく息を吸い込み、わずかにとめてから一歩ずつゆっくりと進み、雲雀を挟んだクルウセの向かい側の椅子へと座った。

紙袋をフォンに渡し、荷物を椅子の横へと降ろす。

「雲雀、おはよう。」

ただそれだけ言い、後はフォンがお茶お入れる音が病室内を支配した。

俺の横にお茶を出すなり、フォンは白とピンクとオレンジの色鮮やかなアレンジメントを飾り始めた。

なるほど、アレンジを持ってきていたのはクルウセだったのか。

俺が持ってきた見舞い品の横には馬鹿でかい、紙で出来た箱があった。

その表面には金色の文字で、ラ・クルウセ・トマリなどと書いてあるから、それもまた見舞いの……大きさをしたら例のタルトだろうか。

「コウ……。」

背中に氷が突き立った気がした。

体を硬直させ、視線を雲雀に固定させている俺に、クルウセは続ける。

「ナゼ、だよ。ナゼ、私たちを否定するの力。」

「……………」

「叔母サマから今日のコト、キいた。ワタシがヒバリの見舞いに来るのハ…ヒバリにタルトを持って来るハ、コレが最後ダ。」

言葉には抑圧された、怒りのような色がかすかに混じっている。

そしてそれは、俺の沈黙で次第に押さえが綻んでいく様で、語気を強く変えていく。

「ヒバリが…それで喜ぶの力？」

三崎警察官のそれと同じ言葉。予想外に投げつけられた言葉で、不意に、立ち上がっていた。

「今の雲雀は……笑う事も、怒る事も、喜ぶ事さえ、出来ないんだ……っ！」

「ヒバリを撥ねたクローンのことハ、ワタシだって憎いサ！ヒバリは、子供が出来ナイクローンのワタシにとって娘のような存在だったからネ！！デモ、コウが私たちを否定するのハ、ハつ当たりとイウやつダ！」

クルウセも椅子を倒す勢いで立ち上がる。

雲雀を挟んでいなければすぐにでも掴みかかってきそうなほどの剣幕で。

「何といわれようと、雲雀が治る確率が少しでも上がるなら……俺は。」

俺は、クルウセの渋面を直視できずに視線を雲雀へと落とす。本当にいいわけじみているな、なんて、他人ごとのように思う。

「コウ……！」

クルウセが一際声を張り上げたとき。その胸にそっと、フォンが手を当てた。

「フォン！？なぜカ？フォンだって同じキモチのハズ……。」

フォンは静かに、それも良く見ていなければ分からないほどかすかに、ゆっくりと首を振った。

「何時からですか？雲雀に、殆ど思い出話しかなかったのは。」

「……」

一瞬、ダレが声を発したのか分からなかった。

数秒してからその声が、フォンのものだったのだと気付く。

その温度の低い目はすべてを踏まえた上で、俺を責め咎めるでもなく、慰めるでもなく、蔑むでもなく。

ただ、真っ直ぐに俺を見つめていた。

「何時から、お見舞いの品を雲雀と一緒にお召しにならなくなりましたか？」

そうだ。

いろいろなものを見舞いに持ってきて、最近の俺はそれに手をつけずに帰っていた。

雲雀との話の内容も、最後に次のデートの約束をするものの、その大半は今までの思い出話が占めるようになっていた。

「すべてのスピーチを拝聴しましたが…何度目からスムーズに話ができるようになったのですか？」

返事など、出来なかった。

責め立てる怒号よりも、泣いて罵倒されるよりも、その淡々とした言葉は俺の胸をずたずたにしたから。

今の俺の矛盾を、まさに、貫いたからだ。

「最後に。何時から、雲雀に対して、そして自分自身に対して嘘をつくことを、躊躇わなくなってしまったのですか？」

「……………」

「帰ろう。スー。」

スーと呼ばれたクローンは、クルウセの言葉に頷き荷物をまとめ始め、クルウセは一つ振り返り、小さく雲雀の名を呼んでから帰っていった。

それを見つめ、そしてフオンはゆっくりと頭を垂れる。

「大変申し訳ございませんが。齋井高道様。あなた様も、お引取り願います。」

かち、かち、と時計の秒針の音が響き渡っている。

「——ああ。雲雀……」

体の中心、芯を抜き取られたようにふらふらと高道は体を揺らしながら病室を後にした。

雲雀に、言葉を残せずに。

第六話

/

演壇にあがる。

初めてこの位置に立ったときには聴衆に生唾を飲み込んだ。

だが、今の高道には全国の人の前にたっているというのに、それはない。

天井が異様に高く、広い部屋。

今たっているのは左右にゆるい弧を描いて広がっている舞台。

その横長の前面の向こうに、くぼんだ部屋の広がりがある。

アリーナや講義室のそれに似た場所だ。

その、舞台の上に立ちつくす高道の一挙手一投足を見つめているのは記者や、スピーチを聞きに足を運んできた人々。
そして、ごくわずかなクローン。

……フォンは、居るのだろうか。

スピーチをすることに対する緊張などは微塵もなかった。

ただ、高道を支配していたのはあの事故の日から、延々と繰り返してきた自問自答。

そして向かい合った人達の言葉。

そして、粘つくように頭の後ろにこびりつく焦燥感だった。

幾十と焚かれるフラッシュが、酷く眩しい。

目の前にしつらえられている台を前に、隣に質疑応答などのサポート役である初顔合わせが一人。
神経質そうな、やつれた男性だった。

左右にはお偉いさんたちとスタッフが控えている。

薄っぺらな紙、数枚を原稿として渡されている。

台の上に置かれたそれは、白紙の上に小虫が這い回っているようにしか見えなかった。

隣の彼がしばらく記者たちに向けて淡々としゃべり、しばらくして俺に小声で合図してきた。

気もそぞろなまま一歩前に踏み出して。

『予定通り』の言葉から、俺のスピーチは始まったらしい。

フラッシュが焚かれる音、そしてそのヒカリ。

いちいちどこかで上がる野次や小さな拍手。

すべてが、俺には不必要なものだった。

「——二〇二四年六月。ご存知の通り、クローン人権が採用されました。それによって一体どれほどの人が嬉々として歓声を上げたのか想像もつかないほど、現在世界はクローンに依存しています。しかし、その裏で、一体どれだけの人が涙を流したのか。それもまた、クローンを愛する人々は知らなければなりません。我々は……」

薄っぺらな紙の内容はもうすぐ一枚分消化してしまう。

やはり、スピーチの内容は俺の中に入ってこないまま、俺はスピーカーにでもなったように淡々と言葉を垂れ流す。

「今でこそ、クローン技術はこれだけ普及していますが、その当初、クローン技術は医療のために発展してきました。全身に癌細胞が転移してしまった。原因がいまだ不明の病を患った。もしくは複数の臓器を移植しなければならぬ重患者など。本来、彼らを助け出すべく発展した技術こそがクローン技術なのです。」

高道の目だけはただ、呆然とフラッシュの海に向けられていた。思考は、ずっと固まったまま。

そのくせ、口だけは達者に言葉をつむぎ続けている。

——多くの部位を移植しなければならないような重病を治療するために。

全身移植を行うために、当時は患者の精巧なクローンを作り出していました。

細胞の劣化を抑え、限りなく本人に近いもう一人の体を作り出したのです。

顔も、体つきも、恐らく思考まで瓜二つであろうもう一人の自分を。

ただ、自分と記憶を共有していないというだけの自分。

拒絶反応の無い、免疫抑制をしながら療養をする必要がない、理想の他人^{ドナー}を作り出したのです。

クローン技術。

これは、はるか彼方、消え入りそうな小さな星のヒカリを、ただ希望と信じる日々を送っていた人達に、まるで太陽のように確かなヒカリを与えたでしょう。

しかし、そのヒカリを遮ってしまったのがクローン人権でした。

法は、その精巧に複製された患者のクローンに人権を与えたのです。

自分の肝臓に疾患があるとき、電車で偶然隣に座った適合者の肝臓

を無理やり奪い取るわけにいかないのは、年端のいかない子供でも幼稚園で習うことです。

会場の一角では、一つ、下卑たさざめきが起こった。

クローン人権法は、クローン技術をつかい『顔も、体つきも、恐らく思考まで瓜二つであろうもう一人の自分を。

ただ、自分と記憶を共有していないというだけの自分』を作り出し——つまり『一人の人間』から、無理やり臓器を奪い取って『殺す』ことを禁じたのです。

「——黒く、厚く垂れ込めたクローン人権という名の暗雲は晴れる事無く、希望のヒカリを覆い隠してしまいました。我々はいつから……っ！」

『何時から』

フォンに言われた言葉。

それが脳裏を駆け巡り、固まっていた思考を溶解させた。

瞳孔が閉じ、焦点が絞られ合わされる。

像をむすんだのは手元の原稿。

急に黙り込んだ高道に隣のサポートが、袖のスタッフたちが、そして記者たちが一際どよめき、ここぞとばかりに焚かれたフラッシュが暴力的なまでに鋭く高道を貫いていく。

『何時から』

「…違う。」

消え入りそうな高道の言葉で、幾億の雲が地面を激しく叩きつけるように会場は騒然となった。

「俺には……すべてを捨てても護りたい人がいる。ただ俺は、どんなことをしても、あの時護れなかった彼女を助けたかった。」

決壊したダムの水のように、空っぽだった体の中にありとあらゆる感情の奔流が駆け巡る。

「彼女が治るように、事故があつた日から今日まで、駆けずり回ってきた。明日には雲雀が目覚めてくれるに違いない、そうしてきつと。あいつはまた笑いながら能天気美味しくそうにケーキでも食べ

るに違いないって。」

しん、と。

会場は静まり返る。

書き起こされた原稿ではない、理論的ですらないこれは、高道の言葉だと気付いたからだろうか。

会場は静かに固唾を飲んで高道の言葉を待っていた。

「朝、目覚めてから夜に意識が切れるまで、今の自分に出来そうなことをすべてやることで雲雀は目覚めてくれるんじゃないかと、そう信じなければ押しつぶされてしまいそうだった。」

語気は荒い。

その色合いは悔恨にまみれた悲壮。

泣きじゃくっているかのような言葉はまるで懺悔だった。

「今日、つい一時間ほど前、いつものように雲雀にあってきた。そしてそこで雲雀のクローン乳母にいわれたんだ。『何時から』と。『何時からそうだったのか』と。」

自分自身に慄然とした。しかし、この先の言葉を、もはや胸にとどめるつもりはなかった。

他人につきたてられる罵声の刃より、恨みの弾丸より遥かに鋭く凶悪な、自分の本当の弱さを。

フォンがいていたように、自分に、雲雀に嘘をついていたことを。

高道の目から、一筋の熱いしずくが落ちた。

「俺は……ずっと、面会時間ずっと彼女の手を握り話しかけ続けることしかできない自分を赦せなかった。でも……それは違った。」

そう、それこそが、俺の弱さ。

「俺は、雲雀に訴え続けることで雲雀がまた笑ってくれる日が来ることを、信じ続けることが出来なかった。それしか、最初から俺に出来ることなんて無かったのに、雲雀が何時目覚めてくれるのか分からない不安に、恐怖に、負けたんだ。」

さわさわと人波が揺れる。

舞台袖は会場には聞こえないものの大騒ぎになっているのが分かった。隣の男もどうすべきかはかりかねて、ただ、俺を見つめている。

高道は、目元を拭くと、大きく息を吸い込んだ。彼にはまだ、言わなければならないことが残っていた。

「朝から晩まで、『雲雀のために』と盲目的に働き続け、がむしやらに調べ続け、そしてクローンを否定し続けることで、信じ続けること、考え続けることから逃げたんだ……」

カサリと音がした。

握り締めていた拳の中には、スピーチ原稿がくしゃくしゃに丸まっていた。

「雲雀が助かるために、確かに全身移植は必要だ。でも、きっとこれは…俺は——」

駄々をこねる子供の八つ当たりと同じ。

きっと、キツカケはランを憎いと思った。
ただそれだけの理由だ。

「……本当に、すいませんでした。」

高道は最後に、頭を下げた。
深く、深く、目の前の台に額を擦り付けんばかりに。

そして、ここに至る前、雲雀に言葉を残せなかったことを思い出した。

最後の最後の一線、毎日『次のデートの約束』を取り付けることで、雲雀の明日の目覚めを信じ続けていた最終ラインを、さつき踏み越えてしまったことを。

「…以上です。失礼します。」

高道は舞台袖に駆け込み、そのまま自分の車に乗り込むべく駆け出した。

今まで止まっていた時が再び動き出したかのように聴衆の怒号とも悲鳴とも歓声ともつかない地響きがかすかに耳に届いてきた。

走る俺について何人かのスタッフが怒声交じりにいろいろなことを言ってきた。

詳細にはどう返事をしたのかも覚えていないが、はっきりと、団体を抜ける旨を伝えたことだけは、覚えていた。

/

クルウセは取り出したハンカチで、その目元を拭っていた。

会場はさまざまな叫びで満ちている。

舞台の上では責任者と思われる人物が額の汗を頻繁に拭いながらいろいろなことを言いつくろっていた。

「コウ。本当にコウはバカ、ダヨ。」

喧騒に紛れ、その片隅でクルウセの言葉はすぐに掻き消え。

クルウセは隣のフォンと共に、寄り添うように会場を後にした。

第七話

/

夜の帳が下りてきている。

俺が雲雀の元へ駆け込んだのはすでに面会時間ギリギリだった。

「雲雀！」

少し、病室の中はひんやりしていた。というよりも、俺の体が火照っていただけかもしれない。

呼吸を整えて、雲雀の元へと駆け寄る。
フォンは、なぜかいなかった。

静かに、横になり目を閉じている雲雀を見た瞬間、涙が出そうになった。

安堵、だろうか。

「雲雀、本当に、ごめんな。気付くのがおせえよな、俺。」

その手を握ると、確かに、証明する様に雲雀の手は暖かった。

——世界中の誰に恨まれてもよかった。憎まれ罵倒されてもよかった。

——それでも俺は、雲雀に笑っていて欲しかった。

手を握る力を、少し強めた。

両手で包み込んで握り、祈るように額に当てて雲雀を確かめた。

さっき、やっと見つめた自分自身。そして言葉の通り。ここで、雲雀は確かに生きている。

俺が、見つめ続けなければならないすべては、初めからずっと、ここにこそあった。

「雲雀……」

——だからこそ、俺が、世界中の誰よりも雲雀を信じなければならなかった。

「……い、わ。」

高道のそれではない音が、空気を揺らした。

伏せていた顔を上げると、雲雀の目は開き、こっちに向いている。

「こゝ、痛い、わ。」

「ひ……ばり？目が覚め……！」

思わず、更に強く手を握る。

「っ！手が、痛いわ。」

我に返って握り締めていた手を緩めた。雲雀の白い手は俺の手形でわずかに赤みを帯びていた。

「わ、悪い。」

「じゅ……」

雲雀の口元にかすかな笑みが浮かぶ。

しかしその変化はかすかなまま止まり、彼女の視線は高道の両手に向けられていた。

「お願い、こー、起こして。」

「ああ。」

高道は抱きかかえるようにして雲雀の軽い体を起こした。

そのとき、はらりと袖口から覗いた腕が、記憶にある雲雀のそれよりもずっと細く、白いことに気がついた。

——あの、雲雀が。

雲雀は高道のその視線に気付いたらしく、腕を隠すように袖をたくし上げる。

そして、口の中で小さく、ゴメンとつぶやいた。

「こー。向こうを向いて。こんな身体、恥ずかしいわ。」

「っ、馬鹿だな雲「お願い。」

俺の言葉を遮って、雲雀は顔を伏せた。

そしてもう一度、お願い。とだけ繰り返す。とても、断ることが出来ない声色で。

「わかったよ。」

その場で振り返ると、背中の服をつかまれたらしく、服がひっぱられた。

そして、額を当てているのか背中の中心辺りに一つ、温もりが伝わってくる。

「こーの背中って、こんなに大きかったっけ。」

「かわらねえって。雲雀だってそうだ。」

「……嘘つき。」

拗ねた様な軽い一言。

そのくせ俺の深遠まで染み込んでくる雲雀の言葉。

動揺がばれない様に静かに一呼吸の間をおいた。

「かもな。」

「ごめん、ね、こー。私、ダメね。こーの手を見て、泣きそうになっ
ちやったわ。」

泣きはらした後のように、雲雀のその声は湿り気を帯びている気が
した。

「私、本当に重かったでしょう？もう、いいわ。もう、いいの。こ
ー」

「おまえ！もういいって、なにがだよ！」

「ダメだわ！」

温もりに引き絞られるように服が握られる。

雲雀は高道を振り向かせないように、強く服を握り締めた。しかし、
それは彼にとって本当に弱弱しく伝わる拘束だった。

「ねえ、こー。私、全部聞こえていたの。……デートの約束も、こ

「の…」

実際、肉体的な痛みを伴うのではないかというほどに、そのためらいがちの雲雀の言葉は俺の真ん中に突き刺さってきた。

「全部、か。」

痛いのは、自分がしてきたことの意味をずっと理解していたからだ。

「振り向かないで。ねえ。お願い。これが最後の、お願い。」

『最後』と。

雲雀は言葉を選び、その上で、『最後』とつぶやく。

俺は、もはや振り向くことも、雲雀に言葉を返すことさえ出来なくなってしまった。

雲雀の言葉を待ちながら胡乱な頭で自分の手を見つめた。

新聞配達で、繰り返した力仕事で、いつの間にか節くれだち荒れた、変わってしまった自分の手を。

「私が、こーを変えてしまったから。優しいこーは、私のせいで汚れるのも厭わないことを、憎まれることさえ厭わないことを、知っているから…。」

雲雀は感情の波を乗り越えるためか、かすかに震える深い呼吸を一度、言葉の間に挟んだ。

「こーは、もう、私の為に頑張らなくていいの。こーのおかげで、私はこうして戻れたから…。」

次第に背中に伝わる感触が弱まってきた。

最後のつながりは、雲雀の言葉が終わりに近づくにつれ放れていく。

「後は私が頑張る番だから。私はまだ…このままの自分を赦す事なんてできないから。だから、本当にこれで終わり。」

——『私がいうのもおかしいかもしれませんが。雲雀さんが目を覚ましたときに、齋井さんは、それで彼女が喜ぶとお思いなんですか？』

——『ヒバリが…それで喜ぶの力？』

思い出したのは、三崎警察官の言葉。
そして、クルウセの言葉。

やはり俺がすべて悪かったのか。

結局俺が雲雀を傷つけた。

気付くのさえ、もはや遅すぎたというのか。

「私は、ずるいから。汚い女だから。今、こー……高道を、真っ直ぐに見るのも、高道に真っ直ぐに見られるのも痛すぎるから。辛すぎるから。だから私は本当に別れたいの。自分勝手にあなたを振るの。」

握られていた服が開放される。

両手の温もりは背中から離れ、背中に残ったのは一つのかすかな温もりだけ。

「——高道、私、あなたが好きよ。きっと、あなたが想う私よりも。……だから私と、別れてください。」

「嘘ばかりだな……。雲雀は俺よりも嘘つきだ。」

『本当に』。

雲雀は思ってもいないことを言うときに、繰り返しその言葉を使う。

でも。

今の俺には、振り向いて雲雀の思いを無碍にすることなんて出来やしなかった。

精一杯、虚勢を張る。

「馬鹿だな。本当に。バカウンジャクツ……。」

水位が上がるのを、歯を食いしばって耐える。

「ありがとう、な。……あの事故の日、これだけ言いそびれていたんだった。」

自分の歯を噛み砕かんばかりにかみ締め、最後に深呼吸を済ませ。
高道は振り向く事無く病室を後にした。

俺とすれ違った看護師が、目覚めている雲雀に気づき担当の医師を呼びに駆けていく足音がリノリウムの床独特音の反響となって響い

ていた。

車に乗り、当てもなく走り回っていた。

ともすれば歪みそうになる視界を必死に確保しながら、ただただ車を走らせていた。

そして、行き着いたのは、ラ・クルウセ・トマリだった。

ヒカリに誘われる虫のように、何故かエントランスまで近付き、そして我に返って車に引き返そうとしたとき、後ろからタイミングを見計らったように声をかけられた。

振り向くと、そこには始めてみたときと同じ純白のスーツに身を包んだクルウセがたたずんでいた。

「食べて、イクンダロ？」

投げかけられた言葉は、予想外のものだった。

魂を抜かれたような高道は一つ頷き、クルウセに案内されるまま奥の個室へと通された。

そして、注文を通すまでもなく目の前に出されたのは、あの日と同じ特大のタルトだった。

あの日のように端をすくい取り、口に運んだ。

それはやはり、わずかな酸味が絶妙なバランスで全体の甘さを引き立て、味を引き締めていた。

しかし。

それは、あの日ほど…。

「…苦い。」

堰を切ったように涙が出てきた。

そのまま二口、三口と食べ続けると、涙は止まるどころか、嗚咽を
まじえ、ただひたすらに流れ続けた。

「……コウ。」

クルウセは泣きじゃくる高道の頭を強く、強く胸に抱いた。

強い力で拘束され、鼻の奥に滲み込んでくる様に、甘い香りと、ふ
つくら焼きあがった生地の香ばしいニオイがした。

終

/
エピソード

「それから、その香りに包まれながら考え始めた。帰途についても今まで何も考えなかった時間のすべてを埋め合わせるように考え続けた。考え、今まで調べつくした知識を織り合わせ、考え、それこそ初めて、というのかな。クローンという『人間』について考え続けた。」

一口、高道は紅茶をすすった。
そして、一呼吸置いてから苦笑し、付け足す。

「そして、書き出したんだ。——ほら。言ったとおり、本当に長かつただろう?」

「いえ。……納得しました。あの数々の本すべてに共通しているように思えた何かが、やっと分かりましたよ。」

「今も、そうなんだろうがね。俺は馬鹿で、愚かで、小さい人間でしかなかったんだよ。」

「……?『俺』、ですか?」

「ん……ああ。当時の話をするとどうにもね。癖が、抜けないんだ。」

黒い皮製のソファ―にふわりと高道は背を預けた。
そして、思い出したように身を乗り出す。

「このタルトは絶品なんだ。ぜひ、食べてみてくれ。」

そついうなり、高道は自分の前にあるタルトにフォークをいれ、口に運ぶ。

部屋には、タルトと紅茶が混ざった陶然とする香りが漂っている。

——とはいえ、俺、甘いもの苦手なんだけどな。

「いただきます。」

一つ生唾を飲み込み覚悟を決めて、赤彦は頷いてから高道に習うようにタルトを口に放り込む。

「おいしい、です。正直、甘いものは敬遠しがちなんですがこれならいくらでも……このタルトは……まさかラ・クルウセ・トマリの……？」

赤彦が口にタルトを運ぶなり、高道はニマリと、悪戯を成功させた子供のような無邪気で残酷な笑みを浮かべた。

「どうなさったんですか？」

「そう、これはラ・クルウセ・トマリのタルト。いや、私が食べた
くて許可なく勝手に引っ張り出してしまったからね。これで君も共
犯者だ。」

「…あの、それはいったいどういうことで？」

「言葉通りの意味だよ。これはね。」

パタパタと、やや激しい足音が段々近付いてきた。

「……存外早かったな。」

「あの？高道先生？」

「このタルトは、妻の、大好物なんだ。」

——Fin.

／
／
プロローグ

「はじめまして。お会いできて光栄です齋井高道先生。今回は忙しい中時間を割いていただき、誠にありがとうございます。」

二十代後半だろうか。

清潔感のある紺色のスーツに身を包む、柔和そうな顔立ちの男はぺこりと頭を下げた。

「そんなにかしこまらないでくれよ。」

「私、昔から先生のファンなんです。『クローンの結婚』をはじめとして、先生のクローンについての数々の著書が世界に多大な影響を与えた功績を認められたとのこと。本当に、おめでとうございます。」

彼は、二三、賛辞の言葉などをならべ、深々と再び頭を下げると、

名刺を差し出してきた。

『読・読・タイムス―望月 赤彦』

「ありがとう。そこに、座ってくれるかな。」

「はい。」

黒い革張りのソファ―に二人は相向かいで座り込む。

「紅茶でいいかい？」

「はい。」

高道は、ルビーのように美しく映えるイチゴタルトと、紅茶を用意した。

いくつかの問答を繰り返してから、本題とばかりに赤彦はわずかに身を乗り出した。

「高道先生にお会いできたらずいとも聞きたいことがあったんですが、よろしいでしょうか。」

「なんだい？」

今までの取材ではこの手の切り出し方をされたことがなかったのだ

ろうか。

高道はソファーからやや、身を乗り出して微笑を浮かべ、小首をかしげた。

「先生の作品には、根底にというのか。どの著書にも共通の何かがあるように思えます。それが、一体何なのだろうと何度読み返しても、私にじっくりと来る言葉が浮かんでこないんです。だから、出来ればそれが何なのか教えていたきたいんですが。」

歳相応ではないほど好奇心に目を輝かせ、赤彦は多大な期待を込め高道を見つめた。

「まいったな。鋭いね、君は。始めてだよ。ここでそれに突っ込まれたのは。」

「ありがとうございます。では、第一号として、ぜひ、教えていただけませんか。」

「そうだな…。長く、なるよ。それに、結構退屈な話になる。」

「長年の想いがかたうんです。たとえそれが一年でも、たとえそれが理解しがたい崇高なお経でも喜んでお付き合いしますよ。」

「はははは…。本当に、まいったな。一体どこから話をすればいいのやら……。」

ソファーの手すりに頬杖をついて、高道は深い記憶の底へと潜っていく。

「そうだな。あれは、私が大学生のときだった。」

そして、深い記憶の底で、大事に、飾りのついた引き出しにしまっていた思い出を、高道はゆっくりと語りだしたのだった。

/

終幕

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5559b/>

夢の痕

2010年10月11日04時45分発行